エドウィンは何の報せを待っていたのか

（チャールダーシュの女王）

生命科学科　１年　K. Y.

私は、この作品を鑑賞していてある疑問を抱いた。それは第２幕でシュタージがエドウィンに結婚を迫った際に、エドウィンは「重要な通知を待ってからだ」と言って、今シュタージと結婚する気がないことを告げているが、○このエドウィンの待っている重要な通知とは何なのか、である。この通知について考えるために、ここでエドウィンがシルヴァ・ヴァレスクに対して公証人を通じて書いた結婚契約書の内容を確認する。

内容は“シルヴァを法律上の妻とし、10 週間以内に神と法と社会の前で挙式することを誓います。”であったが、この内容から見るに、エドウィンは「シルヴァが結婚に同意する。」という報告を待っていたように思える。

(1)　なぜなら、この結婚契約書を書く前に「遠くへ行っても幸せは見つからない」という歌の中で、

・アメリカに行ってもエドウィンとの恋を忘れない。

・幸せはここにある、つまりエドウィンのそばを離れてアメリカに行きたくない。

この２つを歌い、さらにエドウィンの結婚契約書を見せられ、○アメリカに行く気を完全になくしたシルヴァが、この求婚を断るわけがないからだ。しかし、レオポルト・マリア侯爵の計らいにより２人の間に食い違いが生じてしまい、シルヴァはあの日の出来事はお遊びだったのねと落胆し、アメリカに行ってしまい、エドウィンはシルヴァが落胆していることも知らずにウィーンへ向かう。もし仮に、エドウィンが、シルヴァがアメリカに行ったことを知らなければ、「なぜ、すぐに同意の連絡が来ないのか」と不安になり、エドウィンの性格上手紙を書くに違いない。しかし、○軍事演習中の手紙のやり取りは難しいので、「軍事演習が終了次第、書いた手紙の返事が届くはずだ」と思っていたに違いない。契約書で 10 週間としたのはエドウィンが軍事演習に２カ月、つまり８週間とられるので、解放されてから２週間の余裕をみてのことであろうが、その間シルヴァにどのような変化があるか、エドウィンにとっては予断を許さないことなので結婚の約束だけはしておきたく、結婚契約書なるものを書いたととれるが○おそらくシルヴァがアメリカへ行ったことを、エドウィンが知らないはずがない。なぜなら、2 幕冒頭

でフェリが「アメリカはシルヴァの足もとにひれ伏した」と言うように、シルヴァはアメリカで大成功を収めているためである。エドウィンはシルヴァがアメリカへ行ったことを知っているが、エドウィンにも○シルヴァがアメリカのどこにいるかはわからないため、手紙を書くことができず、シルヴァの誤解も解けぬまま、ただただ来ない「結婚に同意する」という報告を待っていたというとらえ方もできる。

私は、エドウィンは２幕後半シルヴァに対し「君はカンチアーヌ伯爵夫人が離婚して僕の妻になったのだから、君は貴族だ。」といっていることから、最愛の者でも、ある程度の身分がほしいのではないかというふうに考えたが、そうなると、結婚契約書の内容とズレが生じる。◎ある程度の身分がほしいならレビュー劇場の歌手であるシルヴァと挙式をするとは大勢の人びとの前で言わないはずであり、この推測はおかしいということになる。**(2)** さらにアメリカでの大成功で、大金を手にしたシルヴァは、身分はともかく、資産の点では遜色のない立場になっている。

他にも「○大成功を収めたシルヴァが、アメリカに留まる、ないし永住する、さらにはアメリカ人の富豪と結婚する可能性、つまり、シルヴァの心変わりや、移住の可能性も踏まえて、エドウィンは『知らせを待っている』」と考えることもできるが、シルヴァは第２幕で、エドウィンにアメリカから帰国していると告げずに、ボニをスキャンダルで脅してまでヴァイラースハイム侯爵邸で催されているパーティーに参加している。この行為からエドウィンのことを気にかけていると読み取れる。本当にエドウィンのことを忘れさったのであれば、かつての恋人に再び会いに来たりはしない。なぜなら恋が再燃してしまうからだ。シルヴァはエドウィンに遊ばれたと思って落胆しアメリカに渡ったが、シルヴァは一途にエドウィンを思いつづけた。恋は人を狂気にさせるが、エドウィンとの恋があったからこそシルヴァは大成功できたのではないか。そのお礼を言いにわざわざ出向いたとも考えられる。が、これはのちの 2 幕でシルヴァとエドウィンが二人きりになった時の会話から、違うと言い切れる。

となると、エドウィンが待っていた報告というのは「シルヴァが結婚に同意する」という報告と推測できる。

２幕でエドウィンが身分にこだわっていたのは、シルヴァがボニ夫人として現れ、しかもそのボニとの結婚が正式なものではないと知ったエドウィンが、「これをうまく使えば、レオポルト・マリア侯爵に文句を言われることなく、ボニ夫人に扮するシルヴァと結婚できる」と考えたためである。しか

し、その思惑はシルヴァには伝わることなく、むしろ、本当の自分を受け入れてもらえないことに対する怒りと悲しみからシルヴァは元・カンチアーヌ侯爵夫人ではなくて、「シルヴァ・ヴァレスク」であることを明かし、結婚契約書を破くという行動を取ったに違いない。

こうして考えると○手紙を郵送でなくあえてオイゲンを遣わしてボニに渡し、エドウィンがいなくなってから開けろ、というオイゲンの言動とレオポルト・マリア侯爵の計らいはこのオペレッタ自体を非常に面白いものにするいいものとなっている。